読者のページ

自主研究のすすめ

衛生局　相澤雅雄

今まさに余暇の時代である。いやとんでもない、年々仕事は忙しく、身は疲労と暇なしでと嘆く人も多いだろう。それでも忙しいながら閑暇は確実にある。

私はこんな自由な時間を郷土史研究に注いでいる。大学二年の頃から始めたから、すでに二十年になる。今日まで休日等を利用して切れ目なく続けてきた。私にとって郷土史研究は、最良な気分転換でもある。

資料調査のために寺社や旧家等を訪問しても、いく先々で好意をもって教えてくれる。かえってこちらが、恐縮してしまうことも多い。友達もでき、交際範囲も広がり誠に楽しい。更に郷土史研究は、地元の人々とのつながりが非常に大切である。人との信頼関係のもとに理解と協力がなければ研究は進まない。人との信頼関係がいかに大切であるかを身をもって知った。

なかには次のような話をしてくれた人もいる。「書いて残さなければだめだ。どんなに拙い文章でも残っているからこそ、いろいろと批評ができるのだ。何も無ければ批評はできない」「毎日コツコツとやる人にはかなわない」「知ることは本を読んだり、人に聞けばよい。しかし独創や構想は知るだけではできない」「伝承や民芸等人が伝える無形のものを、早く調べなさい」と、更に「昔のことも大切だが、現在の町の状況を克明に記録しておくことも大切ですよ。それには大きな視野に立ったものの見方考え方を持ちなさい」と教わったことを今でも印象深く覚えている。やはり営々と努力をして、数多くのデーターを集め、この中から構想を練って成果を発表し、人に意見を求めることが必要なのであろう。

一方私が住んでいる緑区は、新しく移り住んだ住民が多く、これらの人々が区内の歴史に強い関心を抱いている。自分の住んでいる区や町の歴史を積極的に知ろうとする意欲が旺盛である。昭和五十一年には緑区郷土史研究会が発足したが、この会にも新しい区民の人々が多く参加している。活動の成果を研究会誌『都筑文化』等に発表してきた。こうした積み重ねが昭和五十八年に至り、今日編さんがすすめられている『緑区史』へと発展していった。いずれは自分達の手で区史をまとめてみたいという念願が、今かないつつある。

こうして仕事以外に多くの人々とかかわりを持ちながら、郷土史研究に自分のエネルギーを燃やすことも、また楽しいことである。今後も郷土に関係ある埋もれた人や、土地に刻まれた歴史を掘り起こしていきたいと念願している。

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで（電話六七一―二〇二九）。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。一〇〇〇字以内。

＜あとがき＞

今から六年前、調査季報七七号で、「職員の自主研究」を取り上げた。当時、調査季報の「行政研究」への投稿が切れ目なく続き、うれしい悲鳴をあげたものであった。それから暫くの間は行政研究が続いていたが、八七号から一〇〇号までは、わずかに二本しか掲載されていない。投稿が急に少なくなってしまったのである。

これはどうしてであろうか。調査季報に対する見方や期待に変化がみられるのかどうか、よくわからない点である。

そうした中で、調査季報一〇〇号の「一〇〇号を迎えて」に多くの方から、実に貴重な要望・意見をお寄せいただいた。有難いことである。

貴重な要望・意見を生かしたいという思いもあり、意欲的な若い方々に御執筆いただいた。行政問題自主研究という積み重ねをされている方々だけに力作ぞろいである。仕事をすすめる上での視点にしてほしい提言が数多く盛り込まれている。多くの方に是非読んでいただきたいものばかりである。

今後もおおいに新しい方の投稿を願ってやまない。

ところで、この一年ぐらいの間に、身近な職場で二十代の人が五人も本市を退職していった。二人が新しい職場を目指して、三人が家庭の事情ということであるが、なぜか気になる。横浜市役所の仕事が、若い人には魅力がないものになってきているのであろうか。

自治体の仕事の意味や中味を考え、新たな提言が今後も次々と出てくることを願っている。

＜加藤＞